

尖光

第一卷

河毛先生之御魂よ

永久に幸あれよ

後輩諸君よ

全国征覇だ

忘る勿れ！

寄贈

鳥取一中弓道班 5 5 回卒業生

先のことば として

遺詞（先輩として）

君知るや鬼行愛班の心

徒らに鉄拳を振るふ勿れ

若し止むを得ずんば

深く反省せよ 心の中に

汝の行は正義に立てりや

汝の拳は愛班の心によるや

而して汝の鉄拳が

他をして本然に反らしめ

班をして最良ならしむるとき

悲憤と共に振はるるのだ

心せよ 鬼行愛班の心

遺詞かく大愚

心せよ後輩諸君

後輩諸君の弓道研鑽に資するため謹みて此の書

をあた與ふ。昭和十七年度四年生、中西、島田、秋山、村田、矢谷、

岸根、西谷、村江諸君の御助力に対し敬意を表し又深く

謝す。

昭和十七年度五年生一同

一貫流研究に関して

佐藤 香

第一節 序として

昭和十六年より昭和十七年冬にかけて弓道革命とも稱しょうすべき大事件が突発したのである。それは吾等の誇る一貫流を廃して現在各地にて普及されつつある武徳流を行ふ事になったことである。吾等等時の弓道班は悲憤の涙を振って思ひで深き一貫流を捨て武徳流を行ふ事となったのである。噫々あゝその時の心情や如何に。忘れ得ざる一貫流の追憶にふけり忘れ得ざる一貫流伝統を惜み故河毛先生の遺訓を思い浮かべたのである。正心誠意！これこそ河毛先生の遺された唯一の道であり唯一の訓であつた。吾等は訓れぬ武徳流を行つて正心誠意武徳流に転行しやうと思つた。しかし悲しいかな一貫流と武徳流は根本的

に違ひ又実に千万無量の感慨を胸にいだいての練習な

の故何が進歩しようぞ。何が向上しようぞ。吾等一同は困窮

の果 練習は怠りがちになり又弓道班の空気さへもが段々と

乱れてきたのである。此に於て吾等はかく考へたのである。

即ち全国統一の叫ばれている今日ではあるが、尊重すべき地

方に興つた流儀をやめなくとも良いではないか。地方に興つた夫々

の武道流儀は地方に有つた古物と等しきもので国宝とたと

へてもよいものである。鳥取地方古来よりの弓道である一貫流も又

決して一片の紙懐の如く捨て去られてよいものではない。又一貫流

は戦場に即応した流儀として発達し心身鍛錬と共に一射必中

の精神をモットーとして向上したものである。これ即ち戦時下現今に

於て実に存重すべきもので日本精神と相通するものである。

戦時下青年として心の鍛錬は教場に於てなされ、体の鍛錬と攻

撃精神は各部で行へ良いと考へたのである。それには一貫流

が一番良い。又現在の継承団体は吾が鳥取一中弓道部

のみで、これ全国に一あって二なきものである。ここに於て考ふるや

吾等弓道班員の抱負は実に大で、実に雄である。武士は

二君に仕へず、吾等は二流に仕へずと。

(当時四年生だったから)

然として吾等四年生は諸先生に嘆願した。必死の急で嘆願

した。その結果はいまだ分らない。諸君は、一貫流に転じたら故

河毛先生の遺訓を良く守って弓道に邁進されたい。又不幸

にして武徳流に転じたら今までの気持ちを清算して一路邁

進されたい。吾等はかく考へかく戦つたのだ。その気持ちを

くんでくれん事を希望してやまない。元来の作文下手な

身として筆を取り赤面の到りであるが気持ちだけを

読んでいただきたい。

内容目録

第一篇 一貫流研究ニ関シテ

第二篇 一貫流觀善ノ卷

第三篇 述懷

第四篇 夢中論談之卷

第五篇 求身抄

第六篇 弓具ト弓具之取扱ヒ方

以上